宝物集における希望表現について

柴田昭二
連仲友

目次

一、はじめに
二、希望表現の構成形式
三、各形式の用法
四、おわりに

一、はじめに

本稿は、別稿[1]を受け、宝物集を研究資料として、それにおける希望表現[2]の実態を解明しようとするものである。

宝物集は平安時代院政期の説話文学。『日本古典文学大辞典』[3]によると、平康頼著で、康頼が鬼界が島から帰洛（治承三年〈一一七九〉）後数年間の成立とするのが通説である。その内容は宝物とは何かについて議論を展開し、仏道とは何かを述べるものであり、著作の意図は仏教の啓蒙にあると考えられる。漢字交じりの仮名文で表記された語り口調の文章を基調にし、引用漢文と和歌が挿入されるものであり、それは宝物集の特徴的な文体となっている。

テキストには、岩波書店刊新日本古典文学大系『宝物集』[4]を用いる。その底本は吉川泰雄氏蔵本であり、翻字に際して、本文中の〈　〉で示される振り仮名は底本にある振り仮名、校注者の付けた振り仮名は記号を付けずに示し、仮名に漢字を宛てた場合はもとの仮名を〔　〕で表すものとある。

二、希望表現の構成形式

宝物集（以下、「本書」と略す）における希望表現と認められる構成形式と、おおよその用例数は以下の通りである。

「欲」　（二〇例）
「～ントオモフ」　（二八例）
「～ントス」　（二七例）
「願」　（九九例）
「ネガフ」　（三五例）
「ネガハクハ～」　（九例）
「～タマヘ」　（六例）
「望」　（六例）

「祈」　（三二一例）
「乞」　（二二一例）
「請」　（五例）
「求」　（三五例）
「誂」　（一例）
「ホシ」　（六例）
「マホシ」　（七例）
「バヤ」　（八例）
「モガナ」　（六例）
「テシガナ」　（二例）
「ナン」　（四例）

右から分かるように、本書における希望表現の構成は、その形式が多様にわたり、主要形式の用例数も多数にのぼる。それらを大きく纏めると、「欲」とその訓読に関わる「～ムトオモフ」及び「～ントス」、「願」とその訓読に関わる「ネガフ」「ネガハクハ～」及び「～タマヘ」、その他の漢字「望」「祈」「乞」「請」「求」「誂」、和語の「ホシ」「マホシ」「バヤ」「モガナ」「テシガナ」「ナン」という四つのグループに分けられる。

三、各形式の用法

1、「欲」「～ントオモフ」「～ントス」の用法

まず、「欲」の用法を見る。本書において「欲」の用例は二〇例見られ、そのうち名詞用法が一三例、助動詞用法が七例あり、実動詞用法はない。

（1）是生滅法は愛欲の川をわたる船、（巻第二　五六頁）

（2）手をひきてわたるほどに、欲をおこして、（巻第五　二〇九頁）

右の例（1）（2）における「愛欲」「欲」は、何れも人間の「欲望」の意を表す名詞用法である。

（3）天上欲レ退時　心生二大苦悩一（巻第三　一四三頁）

（4）若欲二懺悔一者　端坐思二実相一（巻第六　二五八頁）

例（3）（4）は引用漢文における用例で助動詞用法である。例（3）は正法念経の引用で、「天上から退出しようとする時に」の意と解され、これは「～しようとする」の意、即ち有情の人の「将然」を表す用法であり、希望表現と類似するものである。例（4）は観普賢菩薩行法経の引用で、「もし懺悔したいのならば」の意と解され、これは希望表現の下位分類の「願望」[5]を「説明」[6]する用法と説明される。

次に、「～ントオモフ」の用法を見る。本書に「～ントオモフ」は二八例見られる。

（5）「汝が持所の金五百両を取て、千両になして持ん為に、汝をころしてんと思ふ一念おこりつ、故に、金はうたてき物なりと思て、捨る也」といひければ、（巻第一　一九頁）

（6）都には恋しき人のあまたあれば猶このたびはゆかんとぞ思ふ　（巻第七　三一一頁）

例（5）は「殺したいと思う気持ちが」の意であり、「願望」を「説明」する用法である。例（6）は、「この度の旅には行きたいと思う。」の意と解

され、「願望」を「表出」[7]する用法である。

（7）金字紺紙の大般若経を一部書写せんとおぼすに、一天聖主の皇子たりといへども、山林流浪の行人となりて、分米の砂金にともし。

（巻第五　二四七頁）

例（7）は動作主体が高貴な「天皇の皇子」であるため敬語「おぼす」が用いられるが、これも「願望」を「説明」する用法である。

次に、「～ントス」の用法を見る。本書に希望表現と関連する「～ントス」は二七例見られる。

（8）「我等年来領する山を、隣国よりうちとらんとするなり。」

（巻第五　二四二頁）

（9）母を山へ具して行て、ころさんとするに、大地俄にさけて、

（巻第六　二七〇頁）

例（8）は、「我等が領有する山を隣国が奪おうとしている。」の意、例（9）は、「母を殺そうとすると」の意と解され、いずれも有情物の「将然」を表す用法であり、これらは、希望表現と類似するものといえる。「～ムトオモフ」は明らかに希望表現を表すのに対して、「～ムトス」は「将然」を表すという表現の使い分けが見られそうに思われる。

2、「願」「ネガフ」「ネガハクハ～」「～タマヘ」の用法

まず、「願」の用法を見る。本書に「願」は九九例見られ、そのうち名詞用法が九三例、実動詞用法が四例、助動詞用法が二例ある。

（10）「我東土の衆生を利益すべき願あり。我を渡すべし」と仰られければ、

（巻第一　一三頁）

（11）大聖明王におもひをかけて、二世の願をいのりたまふべし。

（巻第四　一八三頁）

例（10）（11）における「願」はすべて仏教用語の「願」であり、神仏にかける人の「願」の意を表す名詞用法である。

これらの「願」以外に、複合名詞と見なされる形の用法も見られる。

（12）大悲の悲願をあふぎて、来迎引接をまち給ふべき也。

（巻第四　一七五頁）

例（12）における「悲願」の他に、「大願」「誓願」「宿願」「願力」「願主」「願文」があり、何れも仏教用語としての名詞用法である。

（13）若人願レ作レ仏　心念二弥陀仏一

（巻第五　二三九頁）

（14）廻二向彼仏一願レ欲二往生一、

（巻第七　三四六頁）

例（13）（14）は引用漢文における用例である。例（13）は十住毘婆沙論の引用で、「もし人が仏になりたいと願って、心に阿弥陀を念ずれば」の意、例（14）は大宝積経の引用で、「あの仏に廻向して往生したいと願うならば、」の意と解され、テキストでは「ねがひて」「ぐわんず」と訓みが与えられているが、いずれも実動詞用法である。

(15)願我臨下欲二命終一時上　尽除二一切諸障碍一
面見二彼仏阿弥陀一　即得レ往二生安楽国一　（巻第五　二三九頁）

(16)願我命終時　尽除二諸障碍一
面見二阿弥陀一　往二生安楽国一　（巻第五　二三九頁）

例(15)(16)は引用漢文における助動詞用法の用例である。例(15)は華厳経の引用、例(16)は文殊師利発願経の引用で、いずれも「ねがはくは～ん」と読み下し、ともに「私の命が終わろうとする時（中略）、安楽国に往生したい。」の意と解され、一人称の「願望」を直接「表出」する用法である。

次に、「ネガフ」の用法を見る。本書に「ネガフ」は三五例見られ、そのうち連用形名詞法が四例、実動詞用法が三一例ある。

(17)宝は尽くれども衆生のねがひは尽ず。　（巻第一　二一頁）

(18)「我一切衆生のねがひをみて、苦をすくひ、貧窮ならんものをたすけん」とてうせぬ。　（巻第三　一三五頁）

例(17)(18)は「ネガフ」の連用形名詞法の用例である。仏教用語の「願」と異なり、これらの「ねがひ」はより広い意味の、一般的な「願うこと」の意を表す名詞用法である。

(19)物をねがふには、かなふまじき事をねがふ人、おほく侍るめり。　（巻第五　二五二頁）

(20)早く行業をつみて浄土をねがひ給ふべし。　（巻第五　二三七頁）

(21)「弥陀の名号をとなへて、極楽をねがひ給へ」と申給ひければ、　（巻第七　三三五頁）

例(19)は、「ものを願う」「事を願う」という一般的な意味を表す。それに対して、例(20)(21)の「浄土を願う」「極楽を願う」は「極楽浄土に往生することを願う」という意の、定型化した実動詞用法である。

次に、「ネガハクハ～」の用法を見る。本書に仮名表記の「ネガハクハ～」は九例見られ、その文末の結び方で三つの種類に分けられる。即ち、「ン」（一例）、「ベシ」（七例）及び「タマヘ」（一例）で受ける場合である。

(22)「狩の度におほくの鹿うせぬ。ねがはくは御狩をとめられて、日次の鹿をたてまつらん」と申ければ、　（巻第五　一九六頁）

例(22)は「ネガハクハ～ン」の用例である。「狩りをやめて、一日おきに鹿を献上したい。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

(23)「ねがはくは、来世に当国の国司とむまれて、供養をとぐべし」とぞ侍りける。　（巻第五　二四八頁）

(24)「ねがはくは戦とむべし」と制したまひければ、　（巻第五　二四〇頁）

例(23)(24)は「ネガハクハ～ベシ」の用例である。例(23)は、「来世に当国の国司として生まれて供養を遂げたい。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。例(24)は大臣・公卿に「戦を止めてほしい。」の意と解され、他者に対する「希求」[8]を「表出」する用法である。

(25) ねがはくは、明王（みやうわう）、臨終正念（りんじうしやうねん）にしてころし給へ」といひてぬかづきければ、

（巻第四　一八三頁）

例(25)は、「ネガハクハ～タマヘ」の用例である。「不動明王よ、私を臨終正念のまま殺してほしい。」の意と解され、他者に対する「希求」を「表出」する用法である。

また、「ネガハクハ」と呼応せずに、「タマヘ」のみで希望表現を表す用法もある。本書にこのような用法は六例見られる。

(26) あまりにたよりなくなりて、あさましかりければ、観音（くはんをん）たすけ給へ」といのり申（まうし）けるころ、

（巻第四　一七六頁）

(27) 「我師（わがし）の年来（ねんらい）たもち給ふ法花経たすけ給へ」と祈念するに、

（巻第七　三二九頁）

これらの用例はいずれも命令形の形をとっているが、「いのる」「祈念す」と呼応し意味上は「お助けください。」という気持ちが示される希望表現として解釈し、「希求」を「表出」する用法であると考えられる。

3、「望」「祈」「乞」「請」「求」「誂」の用法

まず、「望」の用法を見る。本書に「望」は六例見られ、そのうち名詞用法が五例、実動詞用法が一例である。

(28) いはんや、往生極楽（わうじやうごくらく）の望（のぞ）みにおゐ（い）てをや。

（巻第四　一八九頁）

(29) 随（よにしたがへば）レ世似（のぞみあるにに）二望有一　背（そくにそむけば）レ俗如（きやうじんのごとし）二狂人一

（巻第四　一五二頁）

例(28)は和文における用例、例(29)は行基菩薩遺誡の引用で、それらにおける「望み」はいずれも「希望」の意を表す名詞用法である。

(30) いはんや、一生はつくれども希望（けまう）はつきず。

（巻第二　五九頁）

(31) 念仏の功（こう）なからん人、なにをもてか蓮花台として、往生の宿望をとげん。

（巻第七　三四二頁）

例(30)(31)における「希望」「宿望」は複合名詞形式の用法である。

(32) 允亮（まさすけ）、検非違使（けびゐし）を申（まうし）けるころ、夢（ゆめ）に、地獄（ぢごく）に落（おつ）る官（くわん）をのぞむと、

（巻第一　四頁）

例(32)は、「官位を望む」という行為を表す意で、実動詞用法である。

次に、「祈」の用法を見る。本書に「祈」の用例は三二例見られ、そのうち名詞用法が三例、実動詞用法が二九例ある。

(33) 逢（あふ）までとせめて命（いのち）の惜（おし）ければ恋（こひ）こそ人の祈（いのり）也けれ

（巻第一　四五頁）

例(33)は和歌における用例であり、「恋こそが人間の祈りなのだ。」の意と解され、名詞用法である。

(34) 「明王（みやうわう）の加護（かご）によりて病者（びやうじや）をいのるに、一日にしるしあり。

（巻第二　七九頁）

(35)はやく、薬師如来を称念して、仏道をいのり給ふべし。
（巻第四　一七二頁）

例(34)(35)における「いのる」は、いずれも動作行為を表す実動詞用法である。

(36)燕丹仏天を祈念しければ、馬に角おひ、烏の頭しろく成たりければ、秦皇驚て、いとまをとらせてけり。
（巻第一　四七頁）

(37)仏天に此事を祈請す。
（巻第六　三〇四頁）

例(36)(37)における「祈念」「祈請」は、他の語と複合して用いられる複合動詞の用法である。

次に、「乞」の用法を見る。本書に「乞」は二二例見られ、そのうち実動詞用法が一四例、熟語形式の用法が八例ある。

(38)百里奚が食を道路に乞し、命長かりし故に、天下を司り、
（巻第一　四一頁）

(39)「野べに出る時、一人の婆羅門、物をこひつ。」（巻第五　二二六頁）

例(38)(39)における「道ばたで乞い、」「物を乞う。」は、いずれも「乞う」という動作行為を表す実動詞用法である。

(40)守る者にこひ請て、なめさせ奉り給ひたりけるを、
（巻第一　三五頁）

(41)目連の弟子利堀尸は、乞食すれども鉢をむなしくす。
（巻第三　一三七頁）

例(40)における「こひうく」は複合動詞の用法である。例(41)における「乞食」は「食物を乞いながら仏道修行をすること」という意の仏教用語である。本書にこの「乞食」が六例見られる他に、「乞眼」「乞物」も一例ずつ見られ、いずれも熟語形式の用法である。

次に、「請」の用法を見る。本書における希望表現と認められる「請」は五例見られ、いずれも実動詞用法である。

(42)宿願やぶらじが為に、請によてあたふ。
（巻第六　二九二頁）

例(42)における「請」は訓読される実動詞用法である。その他、複合動詞「祈請」が二例、「乞請」が二例見られ、その用法は前節に述べたものと同様である。

次に、「求」の用法を見る。本書に「求」は三五例見られ、そのうち実動詞用法が三一例、熟語形式の用法が四例ある。

(43)心ある人、みな出家遁世して仏道をもとめてこそ侍るめれ。
（巻第四　一六〇頁）

(44)「よき男の、美濃の国に侍るが、女をもとむるなり、あはせん」といひければ、
（巻第四　一七六頁）

(45)若以レ色見レ我　以二音声一求レ我
（巻第六　三〇四頁）

例（43）（44）における「仏道を求めて」「女を求める」はいずれも動作行為を表す実動詞用法である。例（45）は金剛般若論の引用で、これも上記二例と同じく実動詞用法である。

（46）求不得苦といふは、よろづの事をもとめえず、心にかなふ事なきなり。　（巻第三　一三二頁）

例（46）における「求不得苦」は仏教用語であり、「求めても得られない苦しみ」という意を表す熟語形式の用法である。

次に、「誂」の用法を見る。本書に「誂」は一例見られ、実動詞用法である。

（47）「忉利天にのぼり給ひしを、優闐王の恋奉りて、毘首羯磨と云人に誂へて、　（巻第一　一二頁）

例（47）は、「毘首羯磨という人に願って」の意を表す、実動詞用法である。

4、「ホシ」「マホシ」「バヤ」「モガナ」「テシガナ」「ナン」の用法

まず、「ホシ」の用法を見る。本書に「ホシ」は六例見られ、そのうち「ほし」が四例、「ほしがる」が二例ある。

（48）始に貪といふは、人の物をほしと思ひ、我物をおしと思ふ也。　（巻第二　八四頁）

（49）王祥が親は、あざらけき魚をほしがりしかば、氷ふたがりたる江にむかひて歎しかば、　（巻第一　二八頁）

例（48）における「他人の物がほしい」は内心の「願望」を「説明」する用法であり、例（49）における「魚をほしがり」は第三者の内心の願望が外に現れていることを表す、動詞的用法である。

次に、「マホシ」の用法を見る。本書に「マホシ」は七例見られ、そのうち地の文に一例、会話文に四例、和歌に二例ある。

（50）「こゝにあり」といはまほしかりけれども、　（巻第三　一二七頁）

例（50）は地の文における用例である。「『ここにいます。』と言いたかったが、」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

（51）「われ、つねに国王と生れて、大臣公卿に囲遶せられて、百姓万民にあふがれてぞあらまほしき」との給ふ。　（巻第二　五二頁）

（52）「我つねに父母六親にそひて、立居のすがたをぞ見えまほしき」とのたまふ。　（巻第二　五二頁）

例（51）（52）は会話文における用例である。例（51）は、「このような状態でありたい。」の意、例（52）は、「目にしていたい。」の意と解され、いずれも「願望」を「表出」する用法である。

（53）さ夜衣隔つることはなけれども身をわけてこそいらまほしけれ　（巻第五　二五三頁）

（54）ごくらくの蓮の花のうへにこそ露のわがみはをかまほしけれ

（巻第七　三四九頁）

例（53）（54）は和歌における用例である。例（53）は、「床に入る時には身体を分けて入りたいものだ。」の意、例（54）は、「極楽の蓮台の上になんとかしてはかないわが身を座らせたいものだ。」の意と解され、いずれも「願望」を「表出」する用法である。

次に、「バヤ」の用法を見る。本書に「バヤ」は八例見られ、そのうち会話文（心話文）に五例、和歌に三例ある。

（55）「我汝を殺して、五百両を取て、千両になさばやとおもへる也」と

（巻第一　一九頁）

（56）「仏法の宝にてあらん事をきかばや」といふなれば、

（巻第二　五一頁）

例（55）（56）は会話文における用例である。例（55）は、「あなたを殺して五百両を奪って千両にしたいと思った。」の意と解され、一人称の「願望」を「説明」する用法である。例（56）は、「仏法が宝であるということを聞きたい。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

（57）うら山し雲のかけはし立かへりふたゝびのぼる道をしらばや

（巻第三　一三九頁）

（58）子規あかでこの世をつくしてはかたらふ空の雲とならばや

（巻第七　三一一頁）

例（57）（58）は和歌における用例である。例（57）は、「私も殿上へたち帰り、そのきざはしを再び昇る道が知りたいものだ。」の意、例（58）は、「私はお前と懇意になれるように、空の雲になりたいものだ。」の意と解され、いずれも「願望」を「表出」する用法である。

次に、「モガナ」の用法を見る。本書に「モガナ」は六例見られ、すべて和歌に用いられている。

（59）影清き鷲の山べの月をみて心の闇に迷ずもがな

（巻第一　三九頁）

（60）大空におほふばかりの袖もがな春咲花を風にまかせじ

（巻第五　二五三頁）

例（59）は、「心の闇を晴らし、道に迷わぬようにしたい。」の意、例（60）は「大空に花を覆うほど大きな袖があってほしい。」の意と解され、いずれも「願望」を「表出」する用法である。

次に、「テシガナ」の用法を見る。本書に「テシガナ」は二例見られ、ともに和歌に用いられている。

（61）秋の野の萩の錦を故郷に鹿の音ながらうつしてしがな

（巻第五　二五三頁）

（62）梅がかを桜のはなににほはせて柳が枝にさかせてしがな

（巻第五　二五三頁）

例（61）は、「鹿の鳴き声とともに私の庭に移し植えたい。」の意、例（62）は、「梅のかおりを桜の花に香らせて、それを柳の枝に咲かせてみ

たい。」の意と解され、いずれも「願望」を「表出」する用法である。

次に、「ナム」の用法を見る。本書に「ナム」は四例見られ、すべて和歌に用いられている。

(63) 底清(きよ)みながれる川のさやかにもはらふる事を神はきかなん

(巻第三　一〇八頁)

(64) たのめつゝあはで年ふる偽(いつはり)にこりぬ心を人はしらなん

(巻第五　二三一頁)

例(63)は、「澄んだ心で祓をして祈ることを神はお聞き入れください。」の意、例(64)は、「こりずにあてにする私の心をあなたには知ってほしい。」の意と解され、いずれも「希求」を「表出」する用法である。

四、おわりに

宝物集における希望表現は構成形式も主要構成形式の用例数も多い。名詞用法は主に「欲」「願」及びその他の動詞連用形名詞法などが見られ、そのうち特に仏教用語の「願」が際立つ。実動詞用法は主に「ネガフ」及びその他の動詞である。これらの名詞用法は希望の「概念」を表し、実動詞用法は希望に基づいた「行動」を表し、いずれも内心の希望を表すものではない。したがって、名詞用法と実動詞用法はあくまでも希望表現の周辺的な存在である。

内心の希望を表すには、まず、慣用形式の「～ムトオモフ」「～ムトス」「ネガハクハ～」が挙げられる。「～ントオモフ」は「願望」を「表出」または「説明」する。「～ントス」は本来「将然」を表すものであるが、有情物の「将然」は希望表現と関連がある。「ネガハクハ～」は希望を直接「表出」し、その結び方によって「願望」か「希求」かが決められる。即ち、「ネガハクハ～ン」は「願望」を、「ネガハクハ～ベシ」は「願望」と「希求」を、「ネガハクハ～タマヘ」は「希求」を「表出」する。

そして、和語の形容詞、助動詞、終助詞は内心の希望を表すものが多い。「ホシ」は内心の希望を表し、「ホシガル」は外に現れている動作を表す。「マホシ」は地の文と会話文と和歌に用いられ、「願望」の「説明」及び「表出」を表す。「バヤ」は会話文と和歌に見られ、「願望」の「説明」又は「表出」を表す。「モガナ」「テシガナ」「ナン」は和歌のみに用いられ、「モガナ」「テシガナ」は「願望」を「表出」し、「ナン」は「希求」を「表出」する。

以上、宝物集における希望表現の構成と用法を考察してきた。宝物集は複数の説話を集めた説話集ではなく、平康頼一人によってまとめられた首尾一貫した説話であり、その文体には統一性が見られる。即ち、基本的な漢字交じりの仮名文で表記された語り口調の文章を基礎にして、そこに仏典などの漢文及び和歌が挿入され、独特な文体となっている。したがって、それにおける希望表現も多様性が現れている。

【注】

(1) 柴田昭二、連仲友「希望表現の通史的研究序説」『香川大学教育学部研究報告第Ⅰ部第１０９号』平成12年3月

(2) ここでいう希望表現とは、人の願い望みに関する、一種の心情的表現形式である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態に対して向けられるものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を直接発する場合を希望の「表出」、それ以外の問い質しや過去などの場合を希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望」は「～たい」の形で、「希求」は「～てほしい」の形で表現するのが最も一般

的である。したがって、一人称現在形形式「一人称〜たい」「一人称〜てほしい」はそれぞれ「願望」、「希求」の「表出」であり、一人称の過去形「一人称〜たかった」「一人称〜てほしかった」、二人称形式「二人称〜たいか」「二人称〜てほしいか」、三人称の「三人称〜たがる」「三人称〜てほしがる」などの形式は、「説明」にあたる。

（3）『日本古典文学大事典』第五巻　岩波書店

（4）『宝物集』小泉弘・山田昭全　校注　岩波書店新日本古典文学大系40　二〇一二年四月二四日第一〇刷発行

（5）注（2）参照。

（6）注（2）参照。

（7）注（2）参照。

（8）注（2）参照。

（しばたしょうじ　香川大学名誉教授）
（れんちゅうゆう　広島市立大学客員研究員）

（二〇一六年五月三一日受理）